

【公報種別】特許法第17条の2の規定による補正の掲載  
 【部門区分】第7部門第3区分  
 【発行日】平成19年4月5日(2007.4.5)

【公表番号】特表2004-526355(P2004-526355A)  
 【公表日】平成16年8月26日(2004.8.26)  
 【年通号数】公開・登録公報2004-033  
 【出願番号】特願2002-563741(P2002-563741)  
 【国際特許分類】

**H 0 4 S 5/02 (2006.01)**

**H 0 4 S 7/00 (2006.01)**

【F I】

H 0 4 S 5/02 J

H 0 4 S 7/00 Z

【誤訳訂正書】

【提出日】平成19年2月7日(2007.2.7)

【誤訳訂正1】

【訂正対象書類名】特許請求の範囲

【訂正対象項目名】全文

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【特許請求の範囲】

【請求項1】

音響空間を表現するM個のオーディオ入力チャンネルを同じ音響空間を表現するN個のオーディオ出力チャンネルに変換する方法であって、各チャンネルは、ある方向から来た音を表現する単一の音響の流れであり、MとNは正の整数であり、そして、Mは2以上の正の整数であり、

各々が空間的に近接する2以上の入力チャンネルと関連付けられている複数のデコーディングモジュールを具備し、各入力チャンネルは複数のデコーディングモジュールにより共有され、該デコーディングモジュールの各々は、

前記2以上の入力チャンネルの相関関係の程度と前記2以上の入力チャンネルの相互作用のレベルとを測定することを含む方法により、それぞれが前記N個のチャンネルの一部を構成する1以上の出力チャンネルを前記関連付けられた2以上の入力チャンネルから生成するマトリックスを該モジュールに含ませる工程、又は、

前記2以上の入力チャンネルの相関関係の程度と前記2以上の入力チャンネルの相互作用のレベルとを測定することを含む方法により、前記出力チャンネルのすべてを生成する可変マトリックスの係数を変化させるために、他のデコーダモジュールにより生成される制御信号と共に用いられる制御信号を前記関連付けられた2以上の入力チャンネルから生成する工程、又は、

前記2以上の入力チャンネルの相関関係の程度と前記2以上の入力チャンネルの相互作用のレベルとを測定することを含む方法により、前記出力チャンネルのすべてを生成する固定マトリックスへの入力又は該マトリックスからの出力のスケールファクタを変化させるために、他のデコーダモジュールにより生成される制御信号と共に用いられる制御信号を前記関連付けられた2以上の入力チャンネルから生成する工程、

を具備することを特徴とする、

音響空間を表現するM個のオーディオ入力チャンネルを同じ音響空間を表現するN個のオーディオ出力チャンネルに変換する方法。

【請求項2】

前記モジュールは入力チャンネルの数に応じて階層的に順序付けられており、スーパー

バイザは、階層的な順序に応じて入力信号の分担を制御するために前記モジュールと通信を行うことを特徴とする請求項 1 に記載の方法。

【請求項 3】

音響空間を表現する M 個のオーディオ入力チャンネルを同じ音響空間を表現する N 個のオーディオ出力チャンネルに変換する装置であって、各チャンネルは、ある方向から来た音を表現する単一の音響の流れであり、M と N は正の整数であり、そして、M は少なくとも 3 であり、

複数のデコーディングモジュールであって、少なくともいくつかのモジュールは前記 M 個のオーディオ入力チャンネルのうちの 1 以上を共有し、

各モジュールはそれぞれが前記 N 個のチャンネルの一部をなす 1 以上の出力チャンネルを生成するマトリックスを含むか、又は、各モジュールは、共通マトリックスの係数を変化させるために、又は、1 以上の出力チャンネルを生成する共通マトリックスへの入力の又は該共通マトリックスからの出力のスケールファクタを変化させるために他のデコーダモジュールにより生成される制御信号と共に用いられる制御信号を、空間的に密接に近接する 2 以上の入力チャンネルから生成し、

各モジュールは、前記入力信号が高い相関関係を持つとき、前記出力信号により形成される音響空間が現行の入力信号の主要な方向への狭い音響空間となり、前記相関関係が下がってくると前期音響空間が狭い音響空間から広い音響空間へと広がり、相互に無関係になるまで前記相関関係が下がり続けるとき、前記音響空間が徐々に各々入力信号に関連付けられた方向の複数の狭い音響空間へと変化するように、前記入力信号にตอบสนองしてそのマトリックスを制御、又は共通のマトリックスを制御する、

ことを特徴とする複数のデコーディングモジュールを具備し、

前記モジュールは入力チャンネルの数に応じて階層的に順序付けられており、さらに、階層的な順序に応じて入力信号の分担を制御するために前記モジュールと通信を行うスーパーバイザを具備する、

ことを特徴とする音響空間を表現する M 個のオーディオ入力チャンネルを同じ音響空間を表現する N 個のオーディオ出力チャンネルに変換する装置。

【請求項 4】

音響空間を表現する M 個のオーディオ入力チャンネルを同じ音響空間を表現する N 個のオーディオ出力チャンネルに変換する装置であって、各チャンネルは、ある方向から来た音を表現する単一の音響の流れであり、M と N は正の整数であり、そして、M は少なくとも 3 であり、

複数のデコーディングモジュールであって、各モジュールは1 以上の出力チャンネルを生成するマトリックスを含むか、又は、各モジュールは、共通マトリックスの係数を変化させるために用いられる制御信号、又は、1 以上の出力チャンネルを生成する共通マトリックスへの入力又は該共通マトリックスからの出力のスケールファクタを変化させるために他のデコーダモジュールにより生成される制御信号と共に用いられる制御信号を、空間的に密接に近接する 2 以上の入力チャンネルから生成し、少なくともいくつかのモジュールは入力を共有し、前記モジュールは、入力チャンネル数に応じて階層的に順序付けられた、複数のデコーディングモジュールと、

階層的順序付けに従ってモジュール間で共通の入力信号の分担を制御するために前記モジュールと通信を行うスーパーバイザと、

を具備する変換装置。

【誤訳訂正 2】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0 0 1 1

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0 0 1 1】

発明の開示

本発明に係る方法は、音響空間を表現するM個のオーディオ入力チャンネルを同じ音響空間を表現するN個のオーディオ出力チャンネルに変換するものであって、各チャンネルはある方向からの音を代表するひとつの音響の流れであり、MとNは正の整数であり、そしてMは少なくとも2以上のものである。そして、1以上の出力チャンネルの組を生成し、各組は1以上の出力チャンネルを持つものであって、各組は2以上の空間的に隣り合う入力チャンネルに関連付けられ、組内の各出力チャンネルは、2以上の入力チャンネルの相関関係の程度と2以上の入力チャンネルの相互作用のレベルとを測定することを含むプロセスにより生成される。

【誤訳訂正3】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0014

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0014】

本発明におけるデコーダあるいはデコーディング処理は、処理を行うペアとなったモジュールあるいはモジュール機能（以降「デコーディングモジュール」と称す）が格子状に連なったものにより実行される。デコーディングモジュールの各々は、空間的に最も近接し、デコーディングモジュールに関係する2以上の主要チャンネルから、1以上の出力チャンネルを生成するため（又は、1以上の出力チャンネルを生成するために用いることができるコントロール信号を生成するため）に用いられる。出力チャンネルは、特定のデコーディングモジュールに関係する主要チャンネルに空間的に最も近接した音声信号の構成比を表現する。以下に詳述するように、デコーディングモジュールは、ノードを共有し階層が存在するという意味で、お互いに緩やかに結合している。モジュールは、関係する主要チャンネルの数に応じて階層的に順序付けられる（関係する主要チャンネルの数が最も多いモジュールが最も高く階級付けされる）。スーパーバイザのルーチン機能は、共通ノードの信号が公平に分配され、より序列の高いデコーダモジュールがより低いモジュールの出力に影響を与えるように、モジュールを統轄する。

【誤訳訂正4】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0029

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0029】

人間の耳での（音源の）水平的な位置の特定は2つの位置確定のための手がかり、すなわち相互の振幅及び相互の到達時間差、に基づく。後者の手がかりは信号のペアが時間的に近い場合、±600ミリ秒程度、の場合にのみ有効である。実際的な効果は、2つの実チャンネルに関連付け、あるいはほぼ関連付けさせた共通の信号内容を仮定すれば、左/右の振幅の差に対応する位置に、実体のない中間的な音響イメージが発生するだけである。（注記：2つの信号は相互の相関係数が+1から-1のスペクトルを持つことができる。完全な相関関係がある信号（相関係数=1）は、同一の波形と時間構成を持っているが、振幅は、音響イメージのずれに応じて違った値を持つことができる）。信号ペアの相関係数は1以下に減少するにつれて、認識される音響イメージは広がってゆきついには、2つの相互に関係のない信号に至る。そこでは、中間における音響イメージはなくなり、単に距離を持った左と右の別々の音響イメージとなる。負の相関関係を持つ場合は、普通耳には、2つの音響イメージ間の距離は広がるものの、相関関係のない信号のペアの場合と同じように感じられる。関係付けは臨界帯域、そして約1500Hz以上の帯域をベースに実行される。臨界帯域における信号波形は信号そのものとして使うのではなく、人的な計算能力（MIPS）を確保するために用いる。

【誤訳訂正5】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】 0 0 3 5

【訂正方法】 変更

【訂正の内容】

【 0 0 3 5 】

ドミナントの管理とは、誤差の抑制をさらに変形させたもので、十分明瞭なドミナント（支配的な）信号は最も近い出力チャンネル(nearest neighbor output channels)に対してのみ、デコーダによりパンされるべきという要件である。この条件はドミナント信号の統合イメージを保持するために必要なものであり、マトリックスデコーダの不連続性に寄与する。ある信号がドミナントであれば、他の出力信号、関連する主要な信号から抽出されたもの又はドミナント信号を導き出すために使われる他の補完的な出力チャンネルマトリックス変数（「アンチドミナント変数 / 信号」）により、その信号は抑制される。

【誤訳訂正 6】

【訂正対象書類名】 明細書

【訂正対象項目名】 0 0 5 2

【訂正方法】 変更

【訂正の内容】

【 0 0 5 2 】

$$A = 0.707X+Y$$

$$B = 0.707X+Z$$

ここで、スケールファクター  $0.707 = 0.5$  は、隣接する主要チャンネルに対する関数を保持するための乗数を与える。

【誤訳訂正 7】

【訂正対象書類名】 明細書

【訂正対象項目名】 0 0 6 1

【訂正方法】 変更

【訂正の内容】

【 0 0 6 1 】

この問題は、積の平均値を算出する手法に変更を加えることにより解決されている。平均化する前に、積の絶対値を採用することにより各積の符号を捨て去る。積の各項の符号は調べられる。もし、すべての符号が同じであれば、その積の絶対値を平均演算に用いる。もし、いずれかの符号が他と違っていた場合、積の絶対値を負号化して平均する。同じ符号の組み合わせが起こり得る数と、違う符号が起こり得る数とが違っているので、その補正のため、同じ符号の組み合わせの数に対する違う符号の組み合わせの数の比からなる重み係数を、負号化された絶対値の積に適用する。例えば、3入力のモジュールは同じ符号となる組合せが、8通りの組み合わせ中に2通りあり、違う符号の組み合わせとなるのが6通りある、その結果、スケールファクターは  $2/6 = 1/3$  となる。この補正は、デコーディングモジュールのすべての入力に共通する入力信号成分がある場合にのみ、積算または加算された積を正の方向に増大させる結果となる。

【誤訳訂正 8】

【訂正対象書類名】 明細書

【訂正対象項目名】 0 0 6 2

【訂正方法】 変更

【訂正の内容】

【 0 0 6 2 】

しかしながら、違った次数のモジュールの平均値を比較可能なものとするため、それらはすべて、同じ次数を持たなければならない。従来は2次の相関は2入力の積つまりエネルギーまたはパワーの次元を持つ量を生じる。従って、より高次の相関において平均化する項目は、パワーの次元を持つよう修正されなければならない。従って、k次の次数の相関に対しては、平均化する前に各積の絶対値は  $2/k$  乗に次数を上げておかななくてはならない。

## 【誤訳訂正 9】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0063

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0063】

もちろん、次数を考えないで、必要ならモジュールの各入力ノードのエネルギーを対応するノードの信号の2乗平均として計算することもできる。そうすれば、最初に  $k$  乗に次数を上げ、続いて2次の値に下げる必要はない。

【誤訳訂正 10】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0065

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0065】

いったん、各デコーディングモジュールが各々その主要ノードで共通出力チャンネル信号のエネルギーの推定値を算出してしまうと、スーパーバイザのルーチン機能により、隣接するモジュールにお互いの共通エネルギーを伝達する。そしてその共通エネルギーのポイントで、下記に記すような過程で出力チャンネルの信号の抽出を行うことができる。ノードでモジュールにより用いられる共通エネルギーの計算は、異なる次数を持ったモジュールと重複する可能性を持つ階層構造を考慮しておき、同じノードを共有するあらゆる低次数のモジュールの共通エネルギーの算定値から、高次数のモジュールの共通エネルギーを減算する必要がある。

【誤訳訂正 11】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0066

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0066】

例えば、2つの隣り合う主要チャンネルで2つの水平方向を表現するAとBとに加えて、垂直方向を表現する主要チャンネルCと、さらに、内部に向かい(すなわち、A、B及びCの範囲内の方向)、信号エネルギーとして  $X^2$  を持つ中間的あるいは派生的な出力チャンネルの存在を考える。入力(A, B, C)の3入力のモジュールの共通エネルギーは  $X^2$  となる。しかし、2入力のモジュール(A, B)、(B, C)及び(A, C)も同じとなる。もしAに関連するモジュール(A, B, C)、(A, B)及び(A, C)を単純に加えると、 $X^2$  とはならないで  $3X^2$  という結果になる。共通ノードのエネルギーの計算が正しくなるように、より高い次数の各モジュールの共通エネルギーは、重複する低次数のモジュールの共通エネルギーの算定値から、最初に減算される。したがって、高次数のモジュール(A, B, C)の共通エネルギー  $X^2$  は、2個の2入力のモジュールにおける共通エネルギーの算定値から減算され、その結果各々0となり、ノードAにおける共通エネルギーは  $X^2 + 0 + 0 = X^2$  と算定される。

【誤訳訂正 12】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0067

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0067】

出力チャンネル信号の抽出

すでに注記したように、伝達されてきたチャンネルから線形的な方法で出力チャンネルの総体を回復させる過程は、基本的には出力チャンネルを導き出すための重み付けされた

主要チャンネルの総計を成すマトリックスを形成することである。マトリックスにおけるスケールファクターの最適の選択は、一般的には信号に依存する。実際に、もし現在動作中の出力チャンネルの数が伝達されてきたチャンネル(ただし、違う方向を表している)の数と同じであれば、システムは正確に決まってしまう、効果的なコード化されたマトリックスを正確に解読することが数学的に可能となり、信号源とは独立した信号を再生する。動作中の出力チャンネルの数が、主要チャンネルの数より大きいときであっても、マトリックスを擬似的に逆変換する計算を行うことは可能である。

【誤訳訂正 1 3】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0 0 6 8

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0 0 6 8】

残念ながら、この取り組み方法には問題がある。この取り組み方法において、特にマルチバンドをベースとする場合で、高い精度の浮動小数点を実現しようとする場合の計算をする上での負荷は決して些細な問題ではない。中間信号は最も近傍にある主要チャンネルに向けられると想定されているにもかかわらず、効果的なコード化されたマトリックスの数学的な逆変換又は擬似的な逆変換は、一般的には、ノード共有効果のため、すべての主要チャンネルから各出力チャンネルへの寄与を伴う。もしデコーディングに不完全さがあるならば、そしてそれは実際には避けられないことではあるが、空間的に遠くに隔てられた出力チャンネルから主要なチャンネルが再現される可能性があり、それは決して望ましいことではない。加えて、擬似的な逆変換の計算は、最低2乗平均エネルギーの解(minimum-RMS-energy solutions)を導く傾向にあり、これは、分離を最低限に押さえて、音声を最大限に拡散させるもので、本来の意図に反するものである。

【誤訳訂正 1 4】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0 0 7 1

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0 0 7 1】

デコーディングモジュールの各入力ノード(主要チャンネル)の信号エネルギーから、隣接するデコーディングモジュールからの要求により、ノードを共有するすべての信号エネルギーが減算され、その結果が、残りの計算に使うための正規化された入力信号パワーレベルとなる。

【誤訳訂正 1 5】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0 0 7 2

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0 0 7 2】

ドミナント(dominant)な方向の指標は主要方向のベクトル和として計算され、相対的なエネルギーで重み付けされる。2入力モジュールに対しては、これは、正規化された入力信号レベルであるL-ratioに単純化される。

【誤訳訂正 1 6】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0 0 7 3

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0 0 7 3】

ドミナント方向(dominant direction)を区分する出力チャンネルは、ステップ2の主要

方向のL-ratioを出力チャンネルのL-ratioと比較することで決定される。例えば、上記5出力デコーディングモジュールの入力のL-ratioが0.75であれば、 $0.89 > 0.75 > 0.71$ なので、2番目と3番目の出力チャンネルがドミナントな信号の区分となる。

【誤訳訂正17】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0074

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0074】

ドミナント信号(dominant signal)を直近の区分されたチャンネルと関連付けるパンニングスケールファクターはチャンネルの反ドミナント信号(anti-dominant signal)レベルとの比から計算される。特別な出力チャンネルと結びついた、この反ドミナント信号(anti-dominant signal)は、対応するデコーディングモジュールの入力信号が出力チャンネルの反主要マトリックス(anti-dominant matrix)のスケールファクターと共に行列に組み込まれたときに答えとして出てくる信号である。出力チャンネルからの反ドミナントマトリックス(anti-dominant matrix)のスケールファクターは、1つのドミナント信号(dominant signal)が該当する出力チャンネルへ送られるときゼロ出力となるような2乗平均和(RMS sum) = 1.0を含むスケールファクターである。ここで、出力チャンネルのエンコードマトリックスのスケールファクターが(A, B)であれば、このチャンネルの反ドミナントスケールファクター(anti-dominant scale factors)はちょうど(B, -A)となる。

【誤訳訂正18】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0075

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0075】

証明

もし、1つのドミナント信号(dominant signal)が、エンコードスケールファクター(A, B)を持つ出力チャンネルに送られたとすると、信号は(kA, kB)に増幅される。ここで、kは全体としての信号増幅係数である。従って、このチャンネルの反ドミナント信号(anti-dominant signal)は(kA \* B - kB \* A) = 0となる。

【誤訳訂正19】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0076

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0076】

従って、もし、ドミナント(dominant signal)が、入力の振幅がRMS=1(x,y)に正規化された2入力のモジュールの入力信号(x(t),y(t))からなるとすると、展開された主要信号(dominant signal)は $dom(t)=Xx(t)+Yy(t)$ となる。もし、信号のポジションが、各々(A, B)と(C, D)のマトリックススケールファクターを持つ出力チャンネルとして区分された場合は、ドミナント信号(dominant signal)のスケールファクターの前者のチャンネルに対するスケールリングdom(t)は：

$$SF(A,B)=\text{sqr}((DX-CY)/((DX-CY)+(BX-AY)))$$

一方、後者のチャンネルに対応するドミナント信号(dominant signal)のスケールファクターは：

$$SF(C,D)=\text{sqr}((BX-AY)/((DX-CY)+(BX-AY)))$$

ドミナント方向(dominant direction)は1つの出力チャンネルから他の出力チャンネルへ送られるので、これらの2つのスケールファクターはパワーの合計を一定に保ちながら

口から 1 までの間で互いに反対方向に動く。

【誤訳訂正 20】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0077

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0077】

反ドミナント信号 (anti-dominant signal) が算出され、適切なゲインスケールリング (gain scaling) と共に、非ドミナントチャンネル (non-dominant channels) に送られる。反ドミナント信号 (anti-dominant signal) は、あらゆるドミナント信号 (dominant signal) が除かれたマトリックスの信号である。もし、デコーディングモジュールへの入力が、正規化された振幅 ( $X, Y$ ) を持つ ( $x(t), y(t)$ ) であるとすると、非ドミナント出力チャンネル (non-dominant output channels) の位置とは無関係に、ドミナント信号 (dominant signal) は  $\text{dom}(t) = Xx(t) + Yy(t)$  となり、反ドミナント信号 (anti-dominant signal) は  $\text{dom}(t) = Yx(t) - Xy(t)$  となる。

【誤訳訂正 21】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0078

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0078】

ドミナント信号 / 反ドミナント信号 (dominant/anti-dominant signal) の配分に加えて、基本的にはすでに議論した出力マトリックスのスケールファクターであって、パワーを保持するために倍率を定めた受動 (passive) マトリックスを用いて、2 番目の信号配分が計算される。

【誤訳訂正 22】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0079

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0079】

デコーディングモジュールの入力信号相互間の相関は入力信号の外積値を平均したものを入力レベルを正規化したものの平方根で除算することで算出される。

【誤訳訂正 23】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0080

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0080】

展開処理の過程に戻ると、最終的な出力信号は、クロスフェードファクターを導くためのデコーディングモジュールの入力信号の相関係数を使って、ドミナント信号配分と受動的な信号の信号配分との、重み付けされたクロスフェードの和として算出される。相関係数 = 1 のときは、ドミナント / 反ドミナント信号配分 が排他的に用いられる。相関係数が小さくなるにつれて、出力信号の一群はクロスフェードにより受動的な配分にまで広げられて、小さな正の相関関係を持つにいたる。この値は、デコーディングモジュールに接続された出力チャンネルの数に依存するが、0.2 から 0.4 の間の値を典型とする。さらに相関係数がゼロに向かって下がっていくと、受動的な出力配分の振幅はだんだん減少し、そのような信号に対する人間の耳を模擬しながら、出力チャンネルのレベルを下げる。

【誤訳訂正 24】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0084

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0084】

方向性メモリー

以上に述べたデコーディングモジュールの制御はPro Logicデコーダーのような能動的2:Nデコーダーに似ているという1つの観点がある。それは、その処理においてメモリーだけが、基本的なコントロール信号を導き出す平滑化されたネットワーク内にある、という観点である。いずれかの時点で、ただ1つのドミナント方向(dominant direction)と入力相関の値があり、これらの値によって信号の展開処理がなされるというものである。

【誤訳訂正25】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0085

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0085】

しかしながら、(典型的なカクテルパーティーのような)特に複雑な音響環境において、人間の耳は、一定の位置記憶または位置に対する慣れがあることが明らかになっており、そのため、明らかに所定の位置からの簡潔なドミナント音が違った音、つまり、同じ音源から来るときに認識される概略の方向と比べて、はっきり位置が特定できないような音として認識される。

【誤訳訂正26】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0086

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0086】

デコーディングモジュールに(現にPro Logicデコーディングにおいても)この効果を模擬することは、最新のドミナント方向のトラックを保持する明白な機構を付け加え、方向的に紛らわしい信号の状況の合間に、最新のドミナント方向に向けて出力信号の配分に重み付けすることで、可能である。このことで、音の再現の認識において、複雑な信号群の分離性と安定性を強めることができる。